

第5版のはじめに

2015年に改訂第4版を出版してから2年で、第5版に改訂することになった。それは平成30年度から大きく変わる審査制度に対応することが一番の理由だが、第4版を細かい部分までチェックして修正し、さらに拙著「科研費申請書の赤ペン添削ハンドブック」との連携を図ったためだ。このハンドブックには実例を多く盛り込み、改良のポイントをわかりやすく端的に示しており、この連携によって申請書をよりよいものに仕上げたいと思う。

本文中にも書いているが、今回の改革で大切なことは、基盤研究（B, C）と若手研究で1段階目と2段階目で同じ審査委員が書類審査を行うようになることだ（従来は書類審査は1段階目だけであり、2段階目の合議審査は別の審査委員が行っていた）。これによって同じ審査委員が申請書をこれまでよりもじっくりと読む。つまり、より一層、申請書の書き方が重要になるだろう。

この本の初版を出版してから7年になるが、その間に日本の研究環境はどのように変化したのだろうか？ 2017年3月にNature誌の特集で日本の科学についての現状分析があったが、それは衝撃的な内容であった。日本の科学レベルが低下の一途をたどり、先進国のなかでも最低のレベルになっているのだ。しかし、おそらく多くの現場の研究者は「そうだろうな」と思っていたに違いない。研究者同士で話をしても、研究環境に関してよい話をほとんど聞かないからだ。国からの運営費交付金の減少により国立大学によっては人事凍結などを行っているとも聞くし、実際にアカデミックポストの不足から博士課程への進学者数が減少している。

そういった厳しい研究環境において、科研費の役割はますます重要になっている。そして科研費の充実なくして日本の科学の将来はありえないと思う。

いうまでもなく「科研費を獲得すること」は目的ではなく、それは研究を継続するための手段だ。そして、この本の直接の目的は「科研費を獲得すること」にあるが、わたし自身はこの本は読者の研究をサポートするためのものと思っている。この本を手にとった方々には、この本を大いに活用して、科研費に採択されてほしい。

今回の新版も多くの研究者のお役に立てるようにと願っている。

2017年7月

久留米大学分子生命科学研究所にて
児島将康

初版のはじめに

この本は研究費のなかでも、科学研究費補助金（以下、科研費）を獲得するための申請書の作成方法について、具体的なテクニックをわかりやすく紹介したものだ。

毎年9月になると次年度の科研費の申請が始まる。いうまでもなく科研費は研究費の基礎として非常に重要だ。科研費に採択されるか採択されないかは、研究計画やキャリアに大きな影響を与える。ところが科研費の採択率は現在では約20～25%であり、4～5人に1人しか採択されない狭き門であり、採択されない人の方が圧倒的に多い。科研費にはぜひ採択されたいと誰もが思うが、世の中には「科研費を獲得できる申請書の書き方」などのガイドブックがありそうだが、これまでに目にかかったことがない。各個人、各講座でのテクニックがあり、それはほとんど門外不出になっている。毎年春になって、その年度の科研費の審査結果が発表されると、毎回のようによく採択される人がどの大学にも研究所にも必ずいる。彼（彼女）らはいったいどのような申請書を作っているのだろうか？

そういった疑問をもったのがきっかけで、個人的にいろいろ調べた結果をもとにして、この本を書いた。いろいろな研究者の科研費申請書をチャンスがあればコピーさせてもらったり、久留米大学で保管されている過去の申請書を、無理をいって読ませてもらったりした。さらに科研費を審査する側の経験も積んで、他大学の研究者の申請書もたくさん読んだ。またラボ内の若手やスタッフ、知り合いの研究者などから相談を受けて、申請書作成の手伝いもした。このような経験からいうと、絶対に採択されるという申請書はないが、（多分）絶対に採択されない申請書はある。「科研費に採択されるのは宝くじに当たるようなものだ」「コネがないと採択されない」などと聞いたこともあるが、しかし、そんなことはない！科研費の審査はきわめてフェアなもので、しっかりと準備をしてよい申請書で応募すると、結構採択されるものだ。しかも宝くじよりもずっと当たる確率が高い。

若手研究者に「科研費の申請書の書き方は、どこで習ったか？」と聞くと、まずほとんどの者が「ラボの先輩が作成しているのを、見よう見まねで作成している」と答えるだろう。私もそうだった。実物の申請書は作成した個人がコピーを保管しているだけで、見せて欲しいと頼まないと、見る機会などなかった。私のラボでは毎年の申請書を全員の分をコピーして保存してあり、誰でもいつでも見ることができる。もちろん採択されたものも不採択のものも全部資料としておいてある。これらの資料は、これから申請書を書こうとする者に、非常に役に立っていると信じている。なんととっても実物の申請書に勝る見本はない。そこで、こ

の本では恥ずかしながら私の実物の申請書を見本として付けているし、本文中に出てくる例はすべて実物がもとになっている。ただし、内容は最新のものではなく、2～3年以上前の申請書のものを使っている。

第1章では、科研費とはどのようなものか、現状分析、科研費の種類、審査のしくみ、申請から採択までの流れなどについて紹介している。

第2章では申請にあたっての準備について書いてある。応募種目や応募分野の選び方や、どのような課題が採択されているかや、過去の審査委員についての調べ方を紹介してある。

第3章がこの本の中心部分で、実際の申請書の書き方をできるだけ実物の見本を示しながら解説してある。申請書の各項目ごとにポイントを書いて、どのように書けばよいかアドバイスしている。

第4章は書き上げた申請書をさらに読みやすくするための工夫について紹介している。また、わかっているようでやってみると結構戸惑う電子申請の仕方について順を追って説明した。

第5章は採択・不採択のときにどうすればよいかについて説明した。

この本に例としてあげた申請書は、久留米大学分子生命科学研究所のメンバーによる実物で、快く提供してくれたみんなに感謝している。また悪い例としたにもかかわらず、資料を提供してくれたメンバーには特に感謝している。また佐藤貴弘くん、佐藤浩くん、前原佳代子さん、高山優子さんの4名には「初めての科研費」として経験談をコラムにまとめてもらった。久留米大学研究推進課の梶原克彦さん、川辺貴光さん、村上郁磨さんと久留米大学分子生命科学研究所事務室の土岐陽子さんには、科研費の資料を快くみせてもらって感謝している。また羊土社の吉田雅博さん、冨塚達也さんには「実験医学」連載時からお世話になった。吉田さん、冨塚さんなしにはこの本は完成できなかった。

この本が少しでもみなさんのお役に立って、1人でも多くの方に「科研費に採択された」と喜んでもらえるようにと願っている。

2010年7月

久留米大学分子生命科学研究所にて
児島将康